特集

『縄文』への旅

～「科学」を超えたところに「感動」がある～

富士見町には、誇るべき数多くの「財産」がありますが、井戸尻遺跡と井戸尻考古館もその一つです。歴史の教科書や資料集、美術書には、考古館に収蔵されている土器が掲載され、海外の展示会にも出品されています。

日本のみならず世界中に知られる縄文土器をのこした文化は、およそ五千年から四千年前、八ヶ岳の西南麓を中心に花開いていました。その文化はいま「井戸尻文化」と呼ばれていますが、その中心舞台がまさにここ、現在の富士見町であり、そこに残された土器もまた、日本で最高のものばかりなのです。

歴史や博物館というと、どうしても「むずかしい」というイメージがありますね。勉強というのではなく、かつてこの八ヶ岳の麓に暮らした人々に思いを寄せてみませんか。縄文の旅へ、皆さんをご案内します。

古代ハスの大輪が人々をいやす井戸尻史跡公園。ハスのほかに春からスイレンやアヤメなどが彩りをそえ、各地からお客様が訪れます。

花の名所としても知られるようになった井戸尻遺跡ですが、ここで最初の発掘が行われたのは、昭和三三年のこと。地元の有志と高校生らにより数多くの土器や石器が掘り出され、この地で縄文文化の研究が進められるきっかけとなり、それ以来、日本の研究をリードしてきました。その成果が隣の井戸尻考古館に展示されています。

▲再現映像で紹介する「縄文人の生活」

考古館の展示室に入ると、正面に大きな液晶ディスプレイがあり、この春からハイビジョン映像がみられるようになりました。番組は三本。ズラリと並ぶ石器や土器がどのように使われていたのか、人々はどのように暮らしていたのかを、再現映像で紹介する「縄文人の生活再現」。

不思議な文様で飾られる縄文土器には、いったい何が表現されているのか。どんな意味があるのかを教えてくれる「土器図像を読む」。

時代の移り変わりと、それぞれの地域で中心となる遺跡とともに、八ヶ岳西南麓の縄文遺跡の広がりを鳥瞰する「八ヶ岳山麓の縄文遺跡群」。

最新の研究の成果をわかりやすくまとめてあり、「土器図像を読む」は３Ｄでもお楽しみいただけます。

また音声ガイダンスも利用できますので、学芸員不在でも縄文の魅力に触れることができます。

▲半人半蛙文有孔鍔付土器
（半分ヒト・半分カエルの精霊の像）

さて、展示室に並ぶたくさんの縄文土器は、その多くが食べ物を煮炊きするナベやカマのようなもの。土器がつくられるようになったのは、今から一万数千年前といわれています。それによって人は、たとえば「刺身」や「焼肉」「サラダ」のほかに、「シチュー」や「煮物」「お粥」なども食べることができるようになりました。食べられる食材が増えれば寿命も延びますし、脳も発達します。土器は、人類史上で最初にして最大の発明品といえるでしょう。

また土器の複雑な文様には、深い思いが込められていたこともわかってきました。その中心となるのはカエルや、半分ヒト半分カエルの精霊の像で、それは月を表していたと考えられます。

満ちては欠け、消えてまた甦る月の光に人々は、再生する生命、つまり生命の輪廻をみたのでしょう。その不死性が、縄文土器のカエルの図像に込められています。愛らしい姿が印象的な土偶もまた、新しい生命と実りを約束する女神像でした。

自然とともにあり、自らの命と向き合っていた縄文人の生き方は、今の、そしてこれからの地球に生きる私たちに、多くのことを教えてくれます。考古館にならぶ数多くの遺物はそれを私たちに伝えているのです。

「科学」を超えたところに「感動」がある。当時の音・匂い・空気の流れ、そして、そこに生きた人間の「優しさ」がこの考古館にはあります。